

で出来るだけ大きな材料を選ぶようにした。

精薄幼児のカリキュラムを考える時、子ども自身の成長・変化は非常に遅々としたものなので、子どものテンポに合わせる必要がある。また新しいものをたくさん与えるより、何回かくり返し与える必要がある。子どもが自信つけられるような容易な材料を選ぶことである。

この生活指導グループ時代は遊びの生活でよいと思う。絵をかくことも、運動・音楽も遊びである段階から出発する。簡単ながら今までした事をまとめてみたが、子ども達は個々別々の能力や人格を持ちその指導も細くわかる必要があるが、最少限共通してしなければならぬものもあり、それを一つにまとめていきたいと考えている。

(大会抄録43—44頁)

## 精薄幼児の評価について

愛育研究所 足立寿美

小林慶子

青木祥子

精薄幼児のカリキュラムの中で述べて来た内容を持つ保育を行ない、その中でこのグループの子ども一人ひとり、どのように行動し、変化をしていくか、その姿をとらえ、評価してみた。

まず教師の日誌の中から、グループ一人ひとりの子どもについての記録を抜き出し、月別の行動状況を一覧表につくってみた。前もって観察項目を決めていたわけでなく、記録自体、内容的に不十分であるが、或る程度、子どもの成長のあとをたどることが出来るよ

うである。また、グループ参加最初の昨年六月と、この三月の行動状況を取り上げ、比較検討を行ない、子どもの変化、教育の効果をみてみた。

次に、こうした変化を、全体的にとらえる為の評価を試みた。とりあげた内容は、生活習慣では「食事」「衛生」「後片付け」「排泄」「着衣」の五つであり、社会性では「返事」「朝の挨拶」「帰りの挨拶」「グループへの参加」「友達への関心」の四つである。これらの内容は、我々が精薄幼児の教育の中で、最も基礎的なものと考えて力を入れていた点である。

この内容を、それぞれ四段階に分けた。そうして子どもの具体的な行動をもとにして、段階の基準を作り、各子どもについて評価を試みた。

基準としての具体的な状況を、生活習慣の中の食事を例にとって説明すると、

〔第一段階〕他のことをしている。弁当に関心を持たず食べようとしなない。スプーンが使えない。△第二段階▽ 食べることもあり、残すこともあり一定しない。スプーン使用可能。食事中動きまわることなく、大体、すわっている。こぼす量多い。△第三段階▽ スプーンと弁当を両手で使う。一人で大体食べられる。△第四段階▽ 食事の挨拶が出来、大体こぼさないで食べられる。また、食後片付けをしようとする。以上である。

この我々の家庭指導グループでの目標は第三段階であり、この目標に達した子どもは、年令を考慮した上で、上のグループに移している。この評価は、全体的な子どもの変化を大体掴むことができ、今後の指導への一つの目安としても利用出来た。

以上の試みより、精薄幼児においては、出来るだけ早期に、こ

した集団の中に入れることが、子どもの能力をひき出し、伸すことが出来るといえる。そうして、子ども達の持つ能力なりに自信を持たせ、彼らの生活の場を獲得させ、生活経験を豊かにさせることが大切である。

(大会抄録44-46頁)

## 幼児の話しことばの

### 発達について(その二)

#### 五才児の話し方についての追跡調査(1)

国立精神衛生研究所 桜井芳郎  
川口市立舟戸幼稚園 桜井栄子

**目的** 我々は幼児の話しことばの発達について研究を進めてきたが、今回は五才児の男児三名女児三名について一年間話すことを追跡的に調査した結果から五才児の話し方の発達の過程を明らかにし幼稚園における指導について考察する。

**方法** 調査対象児は川口市立舟戸幼稚園一年保育児で知能を中心に言語、生活環境その他により上・中・下の三段階に相對評価を行ない各段階より男女一名ずつを抽出した。調査の方法は、幼児の話すことを随時、登園の時、自由遊び、お弁当の時や作業の時などの自然な場でとらえ hand writing により記録した。

**結果及び考察** 六名の幼児についての一年間の追跡調査の結果を、あいさつ、話しあい、発表について考察した。

**あいさつ** 彼らが担任教師に自分から進んで朝のあいさつをするようになったのは五月に入ってからである。

五月十四日 朝、登園して保育室に入ると教師が黙っていても

K子「先生おはようございます」  
あいさつの相手が担任教師から担任以外の教師に広がるのは九月から十月頃である。

十月六日 朝、隣のS教師にK子「先生おはようございます。あのね、きょうね、よう子ちゃん休むって」教師「どうして」K子「あのね、おなか痛くなっちゃったんだって」

友達同志でのあいさつがみられるのは十一月から十二月頃である。

十二月十七日 朝、A君「おう、中山君」と言いながら保育室に入ってくる。

なお、朝のあいさつや食事のあいさつ、帰りのあいさつなどは比較的早い時期にできるようになるが感謝やおわびのあいさつができるようになるのは一月すぎである。

**話しあい** 五月、六月頃は担任教師に対する申し出、報告や受け答えなどが、みられるだけで友達同志の間では自問自答的な独語の域を出ないが七月頃になると一往復のごく簡単な対話がみられるようになる。

七月十八日 お弁当の時、K子「うちのチビタンク(太っている弟のこと)パパのことオババってゆうの、ほんたいな」とグループの人に話す。するとM子「うちのおかあちゃん、あしたが、おはあちゃんてゆうと、あいよってゆうの」K子「あいよって、あははは、おもしろいの」と笑う。

これが次第に複雑な内容をもってくるようになり会話へと展開するのは十一月ごろである。

**発表** 特定の親しい友達に報告するようになるのは九月ごろで、グループの中で発表できるようになるのは十一月すぎである。